

FRaU

フラウ
4/13
特別定価
550yen

APRIL 2004 No.311

身も心も頭にも効く 一流品リスト

一流のコスメ 一流の腕時計
一流のランジェリー 一流のフレグランス
一流のジーンズ 一流のファンデーション
一流のジュエリー靴 一流の花ざかり
一流のサングラス 一流のビーチサンダル
一流のピンク下着 一流の白シャツ
一流のオンリー・ワン・ショップ
一流のアートメイク 一流のクルーズ
一流のエアポート 一流のクルマ
一流のカフェ 一流のラウンジ
一流のお花見弁当 一流のパン・ベーカリー
一流のキッチンツール 一流のレストラン
一流のローズガーデン 一流のステーションナリー
一流の露天風呂 一流のエステ
一流の男



魂が呼ばれてる!
ニューヨーク、
ニューヨーク!!
金原ひとみ
伝説のクラブキッス
と遡る!

旬な一流、魂が求める一流を集めました。

身も心にも効く 一流品 大図鑑

中村江里子・
淑女から
悪女へ
超「一流」の
変身

一流の向上心・
キャサリン・ゼタ=
ジョーンズの
生き方エクス

一流の恋に
おちるホテル

努力美人だけが
「一流」に値する

誇り高く
負けるべし!
女の負け犬にも、
一流の魂



トマトが好きだ。なんとも言えない酸味の奥に隠された甘味と少し青臭い感じも。

16世紀に南米から観賞用としてもたらされたトマトが、イタリアのナポリで食用に変身したらしい。

生でも美味しいけど、火を通した味はまた最高。ナポリ名物「売春婦スパゲッティ」スパゲッティ アラ ブッタネスカ(トマトソースにブラックオリーブとケッパー)はあっさり美味しい。何故こんな名前? 売春婦が好んだ味? 赤と黒の色がそういうイマジネーションを抱かせた? いったい全体どうしてなのか不思議……。

それにしてもイタリアのバスタは芸術的。形もそれに合わせた名前までも。

カッペリーニ:天使の髪、ファルファッレ:蝶々、ニード:果、等々とびきり洒落ている。

やっぱり洒落者の国なんだ。

そんなバスタにからめたトマトソースは絶品。赤色と、オリーブオイルの黄緑色がシンプルな白いお皿の中で独特の光をはなつて混じりあっている。ちっとも凝ってないけど安心の美味しさ。

「ナポリを見て死ね」なんて。もう何度も死ぬくらいナポリには来ているけど……。

南イタリアのこの中心都市とその周りには、魅力的な場所が一杯。ソレントもよいし、カプリ、イスキア等の島々も魅力的。丁度カプリにきている友達からの電話。「こっちに来れば!」海を眺めながらお互いに言い合った。

She has to dance

ナポリ・セニティ号で世界をめぐる

躍る水平線

vol.1

ナポリ・ボンバイ

絵と文

河原シンスケ

監修

矢野明子

協力

クリスタル・クルーズ

「えーと、次なる寄港地は?」太陽を浴び、片手にはシャンパン、片手に読みかけの本。豪華客船クリスタル・セニティ号でめぐる地中海の旅へと出かけよう。



図



Shirley Kashiwa

1963年生まれ。87年に渡仏。パリを拠点に、雑誌広告などのイラストや、ファッションブランドのイメージクリエイションなどを手がける。主な仕事にBABY GAP N.Y.のイメージクリエイションや、ルイ・ヴィトン ジャパン "ル マガジン"のクリエイティブ ディレクションなどがある。

近くまでは何度も来ていたが、今まで訪ねられずにいたポンペイ。紀元79年、ベスビオ火山の大噴火で一瞬のうちに火山灰の下に埋もれてしまった都市。

予想を遥かに超す大きさと、その文明の高さにビックリ。既に水道管が引かれ（最初、鉛で管を作ったため人は病気になるってしまったのだが……）、冬山から切り出した水を地下深く掘った空洞に貯蔵し、夏でもグラニートやジェラートの始まりのようなものを食べていたという恐るべき人々が暮らしていたらしい。また車道（動物や荷物を運ぶ荷台専用）と歩道の区別も既にあったり、富豪の家には、夏はいいけど、冬は野外冷蔵庫の役目を持つモザイクの水槽が中庭にもうけられていたり。

愛の女神の御加護を受け、でも単に無頓着な人生や、死への恐怖を解放してもらうために身を捧げていたわけではないポンペイ人は、きっと本当に愛に溢れた生活を夢見て、実現していたのかもしれない。壁面の数々にピナース、そしてマースの愛の姿が描かれているし、あまりにも自然にカーマストラさながらの絵があったり、壁面の中のポンペイ人は、何と言っても皆美男美女揃いというところもイイ。

天使やドクロのモザイクも見つかり、理想郷ポンペイ人は、きっと最高の時も愛と死をいつも背中合わせに感じていたのかも、と思ったりしました。

2nd.Day

7/8

カクテルパーティの華やかなムードに酔いしれる

2日目のメインイベントは船長主催の歓迎カクテルパーティだ。ドレスコードは、もちろんフォーマル。夕刻、時計が6時を告げるとともに、これまでカジュアルな装いでリラックスしていたゲストたちはいっせいにタキシードやイブニングドレスに着替えて、パーティ会場の「パールコート」に向かう。船内はすでに華やかなムードでいっぱいだ。「セレンティ」号の船長、レイドルフ・マーレン氏はノルウェー人。北欧出身の船員たちは伝統的に人気があるのだとか。クルーズ好きにとって、誰が船長なのかはとても重要な問題。そしてこの夜は、その船長と触れ合える絶好の

チャンスだから、皆とても楽しみにしている。マーレン船長自身もそんなゲストの気持ちを十分に心得ていて、パーティ会場の入り口でひとりひとりの手を取って、歓迎の挨拶をしてくれる。こんな心遣いがうれしい。

カクテルパーティの後はメインダイニング「クリスタル・ダイニング」で、キャビアとロブスターのウェルカム・ディナーに舌鼓。500席もあるレストランというだけでも驚きなのに、料理をアラカルトメニューから選べるというのも凄い。これをコントロールするシェフをはじめ、スタッフの有能ぶりにも、改めて脱帽！

